

## 無題

山城47回 岡田正男

小学区制と十五の春は泣かせないとの教育政策のおかげで、僕は幸運にも青春を謳歌した。当時、地域ごとに進学できる公立高校は一つしかなかったし、学校での成績発表など一度もなかった。

全く、のほほん・のほほんと楽しい高校生活を送ることができた。受験勉強とは殆ど無縁で、人並みにマドンナに憧れ、校内でバイクを乗り回し、休講を無上の楽しみとし、講座によってはバックれて友達とダベリ、友人宅で酒を飲んで夜を明かし、山城祭の模擬店で稼いでコンパし、片思いの彼女をデートに誘って、来てくれるかドキドキし、きっちり振られて泣き明かし、女の子が手堅く将来の人生設計をしていることに驚き、その精神年齢の違いを思い知り……

賢い奴も、努力家も、ぐうたらも、悪い奴も……東大現役からヤクザまで、千差万別で、さながら人間動物園のよう。対す

る教師陣も、めったに転勤しない名物というか、凡そサラリーマンには向きそうにない天然記念物的個性の強い人たちばかり。さながら妖怪動物園のよう。

毎日がハラハラどきどき、楽しくて嬉しくて悲しくて寂しくて恐くて、そして欲求不満が一杯で、抑圧されたエネルギーの固まりのような、突っ張ることが、何かを壊すことが凄く格好いいような……とにかく、毎日が輝いていた。僕にとって、その三年間は、その後の三十年間に匹敵する。

授業中、先生に当てられても笑いを取るため、わざとトボケたり、隠れて勉強したりする奴もいて、誰が点数が高いのか低いのか、良く判らなかった。

僕は、そこで、人間の多様性、多面性、能力の多様性を教えられた。九科目の学力試験で人の能力を測るのは間違いだということも教わった。山城人間は、実に多様な意見と能力を持ち、実に生命力が強く、どんな人でも同じ目線で見て行動することが出来る。これが本当のエリートだと思う。

社会人になってから、山城高校のレベルは下の下だと指摘されたことがある。学力では下の下なのかもしれないが、人間力では、上の上にひけをとらないと信じている。

人に出身高校を聞かれたら、必ずこう答えている。『天下の名門、山城高校の出身です！』